野田宇太郎 文学散歩 第24巻

# 野田宇太郎 文学散歩

第24巻

文一総合出版

**著者略歴**　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23（1948）年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16（1941）年，第1回九州文学賞（詩）受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　24
九州文学散歩　下

昭和54年1月11　　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1979
0395-90124-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

長崎　九
西方の門　悟真寺と司馬江漢　浦上天主堂　四番崩れの「旅」　キリシタンの発見　殉教者群像　トードス・オス・サントスの石　西川如見　『長崎夜話草』と近代詩
如見の墓　長崎の花　長崎の石、長崎の橋　鳴滝塾跡
其扇の影　おたくさの墓とともに　ロティの碑　お菊さんの結婚　十善寺の丘の町にて　暮鐘　茂吉と赤彦
河童屏風　薄塚

諫早　八三
静雄詩碑と勇歌碑

佐々にて　八七
佐々の民吉　民吉の旅　民吉の妻は

平戸　九六
うつりかわり　じゃがたらぶみ

島原半島　一〇三
原城址にて

天草　一〇六

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

富岡の旅情　五足の靴　大江天主堂　本渡にて
肥前松浦　二九
『次郎物語』　次郎と鵲　古湯の茂吉　呉須の詩碑　神集島
肥後路　一三九
大江義塾の跡　熊本バンドの碑　ヘルンと漱石　「草枕」と野出峠　小天にて　「二百十日」の宿　阿蘇の獨歩田原坂　御船にて　水俣と德富兄弟　毛銭の墓
薩摩路　一七三
川内の文学碑　川内川のほとりにて　羽島の望郷歌碑鹿児島と加治木
大隅　一八八
桜島　大根占まで　大泊まで　佐多岬にて
日向路　二〇〇
都井岬　飫肥と清武　美々川の旅　奈須渓谷　細島と牧水　延岡と蘆花　高千穂高原　真名井
豊後路　二三七

佐伯の獨歩と精薄児　文人画家竹田　岡城址と「荒城の月」
竹田とキリシタン　久住の歌　日田咸宜園

筑後路　二六六
雉車と六騎　筑後松崎　久留米の彦九郎と鷗外　御井町
森医院　画家の墓

筑紫路　二七三
筑紫と大和　博多港にて　『鍼の如く』　言道と禪寺洞
飛梅　秋月のサッフォー　湖處子と與志雄

北九州　三〇〇
小倉の鷗外文学碑　若松高塔山の文学碑

沖縄本島　三〇七
梯梧の花　ホテルにて　首里にて　那覇　糸満と火野
葦平の「島」　古城址

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

## 九州文学散歩　下　　おぼえがき

『九州文学散歩』前二巻を書いて十三年目に当る昭和四十一年一月から四月にかけて、前回と同じく西日本新聞に連載した『西日本文学散歩』が本巻の主体となっている。発表当時題名を九州とせず西日本としたのは、九州から中国までを書くことになっていたからで、新聞には九州を終って山口県の大部分を書いたが、執筆回数が豫定より延びて、やむなく未完に終った。その後半の中国の部分はあらためて山陽山陰の文学散歩で完成することにして、一先ず九州だけに書き下ろしを加えて昭和四十二年に「日本文学の旅」第十二巻として刊行した。前二巻に書き得なかった部分を書いたものであることはもちろん、十三年の間の九州の変化も記録した。本巻ではなお完全を期して全篇に亙って加筆すると共に、昭和五十一年四月にようやく踏査することが出来て雑誌「市政」に発表した沖縄本島を増補した。

（著者）

九州文学散歩 下

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

# 長崎

## 西方の門

旅立とうとして、わたくしは新らしい手帳の扉に落書きのような気持で書きつける。——西方に日本の門あり、長崎という。

昔の人は東国や中国などの呼び方と共に、九州を下（しも）または西国と呼んだ。わたくしがここで西方の門というのは西国の門口というよりも、中国大陸を含めた諸外国、とくにポルトガルやオランダから西洋の文物をひたすらに受入れた唯一の日本の門、という意味である。

鎖国の永い時代、日本文化の死活の権は長崎一つにゆだねられていたと云ってよい。いまから百年前にようやく近代の夜明けが迫ったころの長崎は、日本の全神経の中枢であり、明治維新の原動力もまた長崎に胚胎したとさえいえよう。この掛替えのない長崎に、昭和二十年には人類の破滅を暗示す

るかのような原爆が投下されたのだ。

はじめて長崎を訪れたのは昭和二十七年冬であった。そのころのわたくしは、長崎の文化に対する憧憬よりも、たしかに人道的悲しみや怒りの方が強かった。だが今日、昭和四十年十二月の長崎の顔からは原爆のケロイドの影もうすれ、わたくしの心も長崎文化への新らしい憧憬にもえている。……しかしそれでよいだろうか。

長崎に着くとわたくしはまず市街や港を一望する場所を求めた。文政年間に書かれた『長崎名勝図絵』にも「長崎の地は四面皆山にして滄海を襟帯とし……」とあるように、南の海から細長く北へ彎入する長崎港を挾んで、三方から大小さまざまの山が迫り、市街は水際から丘の上、山の斜面にまでひろがっている。その山のうち最も長崎の全貌をよく眺めることが出来るのは、港西岸標高約三百三十二メートルの稲佐山である。

遠くから仰ぐ稲佐山の頂上にはテレビの鉄塔が二本の角で大空を無残に突き刺している。その光景をいささか気にしながら、稲佐の町の高台から直線にして約百メートルのロープウエーで登って行った。終点に着くとテレビ塔の脇から南の凹型の展望台へ向って歩いた。途中の平地になった右（西）側に、まるで庭石のように凝った形のかずらの巻きついた自然岩大小二つが立っている。右のやや小さい岩の表面に、幅約七十センチ、縦約六十センチほどの石板がはめこまれ、

おほらかに稲佐の嶽ゆ見はるかす海もはろばろ山もはろばろ　　勇

と、吉井勇自筆の歌が刻まれている。昭和三十四年十二月五日に除幕された歌碑である。

歌碑の背後は目もくらむ急傾斜で、そのはるか下に小さな入江を前にしたさみしげな漁村が箱庭の模型のように見えた。長崎の歴史から逸することの出来ない、長崎以前の南蛮船寄港地福田浦の名残りである。

キリシタン大名として有名な大村領主で、ドン・バルトロメウの霊名をもつ大村純忠がポルトガル人のパドレ（神父）の申入れを許して、長崎を新らしい開港場としたのは元亀二年（一五七一）であった。早速町造りが始まり、大村藩内をはじめ博多、五島、壱岐、平戸、島原、遠くは山口から、戦災をうけた者やキリシタンたちを呼び集め、六つの町が生れた。島原町、分知町、大村町、外浦町、平戸町、横瀬浦町。これがそもそもの長崎最初の町名となった。

こうして長崎港が出来るまでの南蛮船（ポルトガル船）は、すべて福田浦に錨をおろしていた。メルショル・デ・フィゲレドというパドレが船員たちのために教会の儀式を行ない、日本のキリシタンたちもしだいに集まって、福田浦は賑やかな町となった。それがやがて長崎開港と共にいつしか世の中からも忘れられてゆく運命となったのである。……

稲佐山展望台に立つと、岬の端の市営塵芥処理場や、浦上川河口の鉄工所の煤煙が長崎の空に薄い灰色のベールをかけている。それでも南の海には伊王島や香焼島がしずかに横たわり、そこから左へ、長崎の市街は細長く入江を縁取り、飾り絵のように美しい。美しいのは自然の形や色だけでなく、その内面に歴史の宝玉が秘められているからである。

海岸に扇形の出島の姿はすでにないが、歴史の眼鏡で眺めると、この稲佐山からでもはっきりとその形が見える。この西方の門を出入りする東西不滅の偉人たちの姿さえ、わたくしには一人一人が見分けられるような、すばらしい眺めであった。

## 悟真寺と司馬江漢

大正時代に約三年間長崎に住んだ齋藤茂吉の歌集『つゆじも』の中に「十一月六日司馬江漢画を観る。天明戊申冬日於崎陽梧真寺江漢」（江漢は悟を梧と書いている）と題して次の歌一首がある。

江漢が此処に来りて心こめし色をし見なむ雲中観音図

司馬江漢は江戸後期のすぐれた絵師（版画家）で、早くも紅毛（オランダ）画の技法を学び、日本ではじめて銅版画（エッチング）に完成したばかりでなく、詩文を唐橋世濟に学ぶなど古今東西に亙るひろい教養をもった先駆的人物である。元文三年（一七三八）江戸に生まれ、本姓は安藤氏、名は峻、字は君嶽（あざな）、通称勝三郎で後に孫太夫と改めた。号は江漢のほか春波樓、西洋道人、不言道人、蘭亭、桃玄その他を使用している。司馬江漢と名乗ったのは漢詩文を学んでからで、司馬は住所であった江戸の芝に当てたものであり、江漢の号については「予が祖先は紀州の人なり。紀の国に日高川、紀の河とて大河あり。洋々たる江漢は南の紀なりと、故に号す」と自ら述べている。画才に恵まれて幼少の頃から狩

野派の手ほどきをうけたが、長じてわが国錦絵の開祖鈴木春信の門に入り、鈴木春重と名乗ったこともあった。

江漢は文化年間に筆録した『春波樓筆記』の中に「鈴木春信といふは浮世絵師、当世の女の風俗を描く事を妙とせり、四十餘にして俄に病死しぬ、予此に贋物を描きて板行に彫りけるに、贋物と云ふ者なし、世人我を以て春信なりとす。」と自ら語っているように、鈴木春重時代の江漢の美人画にはわざわざ春信の落款を用いた例もある。江漢が画家宋紫石について写生画法を会得したのはその後である。オランダ人からは西洋画法を学び、銅版画の製法を修めたのは、天明三年（一七八三）頃と思われる。しばしば旅に出ては風景写生画を描き、自ら教養を高め、多くの藝術的銅版画をのこしているが、そのほかに先の『春波樓筆記』をはじめ『江漢後悔記』、憧れの長崎に旅した記録的紀行文学ともいうべき『江漢西遊日記』『画図西遊譚』などの著書がある。日本の西方の門長崎への長旅を終え、数々のスケッチをのこした江漢は、晩年を江戸麻布の笄町に住み、文政元年（一八一八）十月二十一日、八十一歳で歿した。墓は深川猿江町慈眼寺にあったが、現在はその寺と共に西巣鴨の染井墓地に隣接する墓所に移されている。芥川龍之介の墓などもある慈眼寺墓地の「江漢司馬峻之墓」と見事な文字を彫られた墓石は、現在東京都の文化財である。

江漢が長崎に遊んだのは天明八年（一七八八）五十二歳の頃で、『江漢西遊日記』によると同年四月二十三日に江戸芝新銭座の家を出て、東海道、山陽道をたどり名勝旧跡を訪れながら九州に入り、大村湾岸の時津からようやく長崎の町に入ったのは十月十日であった。それから十一月十四日の雨の日

に心をのこしながら出発するまでの約一カ月餘を、オランダ大通詞吉雄幸作の家に逗留して、長崎の見聞を弘めた。稲佐の悟真寺を訪れたのはその間の十月二十六日と二十八日であった。

悟真寺は稲佐国際墓地のある寺としても知られているが、なお、わたくしには江漢との因縁のある、長崎に現存するもっとも印象的な唯一の寺としての興味もあった。昭和三十八年夏にたまたま長崎の地を踏んだ折にも、わたくしは悟真寺を訪れた。……

長崎の展望をほしいままにした稲佐山を下り、市街に入ると、国際墓地のある稲佐町二丁目の悟真寺に向った。バス通りを南へ歩き、町角の向うに鉄筋コンクリートに改築されて間もない悟真寺本堂の屋根が見え、右手奥に国際墓地の中国人墓域の一角が望まれた頃、何気なく曲り角の家の壁に掲げられた町名標識をみると、稲佐町二丁目の筈が曙町となっていて、稲佐のイの字もない。わたくしは思わず、これはいけない、と心につぶやいた。近ごろ悪疫のように各地方の歴史の古い都会をいたずらに混乱させ、正しい歴史を重んじようとする心ある日本人を悩ましつづけている天下り的地番整理の悪法が、とくに長崎の歴史としても重要な、掛替えのない稲佐町の名を悟真寺から奪い盗ったのだ、と直感したからである。

悟真寺は戦国時代の豪族伊奈佐治部太夫の居城の跡と伝えられる寺で、筑後（福岡県）善導寺から来た僧聖譽がその寺を開建したのは、慶長三年（一五九八）だとされている。だから悟真寺は稲佐の名の発祥地でもある。それがつい最近何の意味もない曙町に変り、稲佐の名はわずかに稲佐小学校の附近にだけ残されている。わたくしは長い稲佐の歴史が崩壊する音をきくような気持で、悟真寺の前

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook